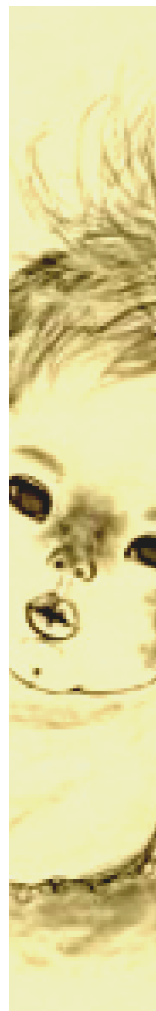


「大人になれなかった弟たちに……」

八組 読んだ読んだ 第二場面



・生まれて初めて見た疎開先の桃源郷で、「僕」は楽しい暮らしができると思っていたが、実際は厳しい暮らしが待っていた。 中嶋 翔

・この山の中で「僕」は、母たちと疎開暮らしを始めて、鮎を捕ったり楽しい暮らしができると思っていたが、実際はものすごく苦しい暮らしでものすごく辛かった。 加藤千晶

・疎開先が決まってくれしかった「僕」は、楽しい暮らしが待っていると思っていたけど、実際は想像以上にきつい生活だった。 堀 鮎美

・「僕」は、疎開すれば今までとは違って楽な暮らしができると思っていたけど、実際は疎開しても今までと変わらず苦しいままだった。 白木淳奈

・現実を知らない「僕」は、疎開して幸せな暮らしが待っていると思っていたが、実際は楽ではなく、「苦」であり、現実を知らされた。 奥村直也

・「僕」は、親戚に断られたが、結果、疎開先は石釜になり、これからの暮らしは楽しいものと思えました。しかし、実際は、つらく、苦しい生活で、食べるものはありませんでした。 足立彩音

・「僕」は、石釜という所に疎開して楽しい暮らしがこれからできると思いわくわくしていたけど、実際母の着物がなくなってしまうたりして、とても苦しい毎日になっていった。着物がなくなると食べ物を買えなくなるから、とても大変だったと思いました。 渡邊桃香

・これから待っている疎開生活に胸をはずませていた「僕」は、その暮らしがどんなに辛い生活なのかも知らずに、楽しい生活を想像して、でも、実際はものすごく苦しい生活が待っているのだった。その現実を「僕」は受け止められるのかなあ、と思いました。 赤座利菜

・「僕」は、親戚の人の所への疎開は断られてしまったけれど、母が行ったこともない山の中の親切な人に頼んでやっと疎開先が決まった。疎開したら、暮らしがとても楽になると思ったけど、実際は厳しい暮らしで、母の着物がどんどんなくなっていった。 小川留梨奈

・母のおかげで疎開先が決まった。これから始まる新しい暮らしに楽しみを感じ、胸をはずませていた「僕」は、本当のことを知らなかった。実際は、その楽しみをくつがえすような大きな試練が立ちふさがっていた。しかし、そんな中でも、母は子どもを守るため、高価な着物を米と換えながら戦っていた。 大野晃季

・やっと安心して生活できるとほっとしていた「僕」は、桃源郷のような疎開先に行き、これからの生活に胸をはずませ、楽しい気持ちになっていた。しかし、実際は、疎開しても食べ物がなく、あゆも捕れず、ただの苦しい生活が待っていた。 久保田真也